

# 昭和40年代～50年代ミステリ専門誌の旅行記事

——ミステリー文学資料館所蔵資料の調査から——

横濱雄二（甲南女子大学）

## 1、はじめに

昭和40年代から50年代、すなわち1960年代後半から1970年代は、旅行が娯楽として大きな位置を占めるようになった時期である。一方、日本のミステリでは、1980年代にトラベル・ミステリが大きな潮流となった。現実の旅行をめぐる動きと、ミステリにおける旅行を扱った作品への注目との間には、どのような関係があるのだろうか。

ところで、雑誌媒体は、その記事の内容のみならずその誌面構成を含めて、現実の事象を指し示す記事と、虚構の作品との両者が混在し、両者をつなぐ言説空間を形成するものである。本稿では、このような関心のもと、旅行ブームの時期のミステリ専門誌の動向を探ることを通じて、トラベル・ミステリが置かれた状況について考察したい。

## 2、旅行ブームとトラベル・ミステリ

具体的な調査について述べる前に、現実の旅行ブームと、トラベル・ミステリの状況について、簡単に確認しておこう。

### (1) 旅行ブームについて

1960年代から70年代は旅行ブームだった。日本交通公社が発行した『旅行産業論』では、国内旅行の市場は1964年の東京オリンピックから1970年の日本万国博覧会（いわゆる大阪万博）にかけて大幅に拡大したという。同書掲載の表によると、1泊以上の観光レクリエーションの量は1961年の3700万人回から8800万人回へ増加、1泊以上の観光レクリエーション消費額は同じく1,820億円から9,558億円へと伸長した。また、同書によると、それまでの団体旅行に対し、個人・グループ向けのパック旅行が1962年に誕生した。

この旅行ブームについて、鉄道史家の老川慶喜の著作（2017、2019）に基づいて概略を紹介する。1963年に観光基本法が制定される。国鉄は1965年に「みどりの窓口」を設置、68年には「旅行センター」を開設する。1970年代

には中央省庁にも余暇を担当する部局が設けられ、国民休暇村など公的な余暇施設の整備が進められた。

1970年の大阪万博に際して国鉄は新幹線の増発を含めて旅客輸送に対応した。その終了後の旅客誘致策として、「ディスカバー・ジャパン」という名のもとで、日本の風土を改めて見直そうという趣旨のキャンペーンが、とくに若い女性をターゲットとしてはじめられた（老川（2017）、成相（2014））。1971年の2月以降は徐々に具体的な地方色を強め、ミニ周遊券などの商品販売も重点的になされたが、1974年に石油危機に対応すべくキャンペーンは中止となった。その後、1978年から1981年までは別のキャンペーンとして、山口百恵の曲が有名な「いい日旅立ち」が実施された（成相（2014））。

このように、1960年代後半から1970年代、すなわち昭和40～50年代は、東京オリンピック、大阪万博にあわせて輸送力が強化され、また余暇施設の整備が進んだこともあり、娯楽としての旅行がブームとなった時期であった。

## (2) トラベル・ミステリの状況

佳多山大地（2019）は、トラベル・ミステリーを4期に区分する。第二次世界大戦前の「開花期」、戦後から高度経済成長期の「形成期」、1978年の西村京太郎『寝台特急殺人事件』を嚆矢とする「隆盛期」、ブームが沈静化する1990年以降の「雌伏期」である。

このうち本稿と関わるのは形成期と隆盛期である。佳多山は形成期について鮎川哲也と島田一男の活躍を指摘したうえで、新幹線に注目して梶山季之『夢の超特急』（1963）、森村誠一『新幹線殺人事件』（1970）、清水一行『動脈列島』（1974）を挙げる。1975年から翌年にかけて、鮎川哲也は鉄道ミステリーのアンソロジー『下り「はつかり」』『急行出雲』『見えない機関車』の3冊を光文社から上梓する。さらに1976年から78年にかけて『鉄道推理ベスト集成』（全四冊、徳間書店）を編む。佳多山（2019）、山前穰（2008、2016）とも、このアンソロジーを重視している。

上記の動きのなかで、西村の『寝台特急殺人事件』や『終着駅殺人事件』、さらには内田康夫『後鳥羽伝説殺人事件』（1982）、すなわち十津川警部と浅見光彦という強力なシリーズキャラクターが誕生した。さらに他作家も参入して、1980年代以降、一大ブームとなった（権田・新保（2012））。

このように、1960年代の新幹線への注目、70年代後半の鮎川哲也らの動きがあったうえで、西村京太郎の鉄道ミステリーへの参入を嚆矢として、トラベル・ミステリーが隆盛を迎えたという流れが見て取れる。

### 3、調査対象の雑誌とその範囲

本調査では、光文文化財団ミステリー文学資料館所蔵の雑誌資料のうち、1960年代後半から1980年代前半のものをとりあげた。その際は、雑誌を実見し、旅行や地域性と関連すると推測される記事について、実際に内容を確認した。調査対象とその範囲は、以下の通りである。なお、所蔵されていないなどで実見できない号もあったが、ごく少数であるため、とくに表示しなかった。

(1) 『大衆文学論叢』 風林書房、季刊。

1974年10月～1978年7月（第1号～第7号）を調査した。

(2) 『推理界』 浪速書房、月刊。

1967年7月～1969年4月（第1巻第1号～第3巻第4号）を調査した。

(3) 『ハヤカワミステリマガジン』 早川書房、月刊。

1966年1月号～1985年12月号を調査した。

『ハヤカワミステリマガジン』は、アメリカのミステリ専門誌『エラリー・クイーンズ・ミステリマガジン』（EQMM）日本版として刊行されていたが、1966年より上記に誌名を変更した。その後、EQMMの特約は光文社に移ったが、海外ミステリの翻訳が中心であることに変わりはない。本調査では、ミステリの専門誌として対象に加えた。なお、現在は隔月刊である。

(4) 『EQ』 光文社、隔月刊。

1978年1月～1989年11月（第1巻第1号～第13巻第6号）を調査した。

『EQ』はEQMMの特約として創刊された。そのため、当初は海外ミステリが中心であった。本調査では、ミステリ専門誌として、また、トラベル・ミステリを数多く出版した光文社の雑誌として調査対象とした。なお、同誌は1999年7月号で休刊となった。同誌については森下祐行による海外ミステリ紹介のウェブサイト「ミスダス」において目次が掲載されており、詳細な索引が付されている。本調査でも適宜活用した。

(5) 『小説サンデー毎日』 毎日新聞社、月刊。

1969年4月～1977年9月（休刊号）を調査した。

『小説サンデー毎日』は『別冊サンデー毎日読物専科』として1969年4月に刊行された後、改めて同年10月に月刊誌として独立した。1970年4月より誌名を『小説サンデー毎日』に変更した。

#### (6) 『小説推理』 双葉社、月刊。

1961年12月～1989年12月(第1巻第1号～第29巻第12号)を調査した。ただし、臨時増刊号については調査していないものもある。

『小説推理』(双葉社)はもともと『推理ストーリー』として1961年12月に創刊された。1969年9月号(9巻9号)より『推理』へ変更され、さらに1973年1月号(13巻1号)より『小説推理』となったが、巻号数は前誌から継続しており、現在まで続いている。判型は当初B5版であったが、『小説推理』への誌名変更とともにA5版となった。

### 4、調査の結果

#### (1) 『大衆文学論叢』

旅行あるいは地域と関わる記事は見られなかった。

#### (2) 『推理界』

旅行あるいは地域と関わる連載記事が2件あった。ひとつは堺末起「ミステリーのふるさと」(1967年7月～69年3月、全20回)である。各回見開き2頁で、地方別にミステリ作家、作品を紹介するものである。もうひとつは簡単な旅行案内の1頁記事「ルート'67の旅」(無署名)で、1967年7月号、8月号、11月号の3回掲載された。

#### (3) 『ハヤカワミステリマガジン』

海外ミステリの翻訳が中心であるが、読物として海外ミステリの紹介や評論のほか、海外事情そのものを扱う記事も散見される。表1に旅行関係の連載記事を年代順に整理した。

1966年2月号より中内正利「現代アメリカの風物」(1967年1月号まで)と小鷹信光「アメリカ——うらのおもて」(1966年7月号まで)が連載された。その後は平尾圭吾「紐育の日本人」(1968年12月～70年11月)、小林信彦「わたしの世界地図」(1974年1月号～75年2月号)が続く。

とりわけ木村二郎は長期連載を続けた。「ニューヨーク便り」(1973年8月号～76年8月号)、「マンハッタン・ミステリ日記」(1976年9月号～78年9月号)、「私立探偵のかじったニューヨーク」(1978年11月号～79年12月号)と途切れることなくアメリカ事情を伝えている。続く「ニューヨーク林檎の秘密」(1980年1月号～81年8月号)以降も連載は続くが、アメリカのミステリや雑誌を紹介する方向へと変化した。

1980年以降では、アメリカの警察事情に関する水野晴郎「アメリカン・ポリス体験旅行」(1980年1月号～81年3月号)、イギリス滞在記の西森咲也子「B列車で行こう」(1981年12月号～82年11月号)、フランス事情を扱う藤田宣永「Midnight in Paris」(1982年1月号～12月号)、同じくフランスの滞在記である長島良三「メグレのパリ」(1982年12月号～84年1月号)がある。

| 執筆者   | 連載名               | 期間              | 回  | 頁 |
|-------|-------------------|-----------------|----|---|
| 中内正利  | 現代アメリカの風物         | 1966・2～1967・1   | 12 | 4 |
| 小鷹信光  | アメリカ——うらのおもて      | 1966・2～1966・7   | 6  | 3 |
| 平尾圭吾  | 紐育の日本人            | 1968・12～1970・11 | 22 | 1 |
| 小林信彦  | わたしの世界地図          | 1974・1～1975・2   | 13 | 7 |
| 木村二郎  | ニューヨーク便り          | 1973・8～1976・8   | 30 | 2 |
| 木村二郎  | マンハッタン・ミステリ日記     | 1976・9～1978・9   | 24 | 2 |
| 木村二郎  | 私立探偵のかじったニューヨーク   | 1978・11～1979・12 | 14 | 4 |
| 木村二郎  | ニューヨーク林檎の秘密       | 1980・1～1981・8   | 20 | 2 |
| 水野晴郎  | アメリカン・ポリス体験旅行     | 1980・1～1981・3   | 15 | 5 |
| 西森咲也子 | B列車で行こう           | 1981・12～1982・11 | 12 | 3 |
| 藤田宣永  | Midnight in Paris | 1982・1～1982・12  | 12 | 1 |
| 長島良三  | メグレのパリ            | 1982・12～1984・1  | 14 | 4 |

表1 『ハヤカワミステリマガジン』旅行関連連載記事一覧(筆者調べ)(i)

海外事情のほかに注目すべきは、実作を含めた特集である。『ミステリマガジン』では毎号なんらかの特集が組まれているが、そのなかに旅行や地域をテーマにしたものがある。筆者の確認した範囲では、1982年9月号に「特集／鉄道ミステリ傑作選 ミッドナイト・エクスプレス」として、海外の実作4作品に加え小池滋「寝台列車のあれこれ」、大井良純「マーロウもオプも乗った西海岸の列車」という2本のエッセイが掲載されている。また、1984年10月号は「世界ミステリ・ツアー」とあるものの、ローマやニースの地名が角書きに付された海外作品5編が集められているのみである。

1985年10月号「大特集アメリカの探偵と街」は、海外の実作と日本人による2頁のエッセイを1作品ごとに組み合わせた構成となっている。目次を元に表2に整理した。なお、海外の作品には地名等を含む惹句が付されているので、

i 「頁」欄では、各回の基本的な頁数を示した。休載の号は特に明記しなかった。以下の表も同様である。

各欄の1行目にそれを記し、題名は2行目とした。

| 種別   | 執筆者       | 作者題名                                 |
|------|-----------|--------------------------------------|
| 作品   | S・グリーンリーフ | 〈サンフランシスコ〉 ジョン・タナー登場<br>アイリス         |
| エッセイ | 東理夫       | ロング・ハード・ドライブ                         |
| 作品   | S・カミンスキー  | 〈ハリウッド〉 トビー・ピーターズ登場<br>ルイス・ヴァンスを射った男 |
| エッセイ | 武市好古      | ハリウッド・トークス                           |
| 作品   | S・バレッスキー  | 〈シカゴ〉 V・I・ウォーショースキー登場<br>スリー・ドット・ボウ  |
| エッセイ | 福田敏朗      | シカゴ・トラディション                          |
| 作品   | M・コリンズ    | 〈ニューヨーク〉 ダン・フォーチュン登場<br>八千万の屍        |
| エッセイ | 木村二郎      | チェルシー昔と今                             |
| 作品   | L・ブロック    | 〈ニューヨーク〉 マット・スカダー登場<br>夜明けの光の中に      |
| エッセイ | 小沢瑞穂      | ミッドタウンの57丁目界限                        |
| エッセイ | J・ハンセン    | 〈エッセイ〉 自作を語る<br>なぜゲイ探偵を描くか？          |
| 解説   | (無署名)     | アメリカ私立探偵地図                           |

表2 『ハヤカワミステリマガジン』1985年10月号特集(目次から筆者作成)

また、旅行とはやや異なるが、冒険と銘打った特集もある。1983年8月号は「冒険大特集」として、海外の実作2編のほか、東理夫編「冒険への招待」として、経済や服飾など様々な観点から分析するエッセイを北上二郎、関口苑生、皆川正夫、山口雅也らが寄せた。1984年9月号「海外・日本競作集 特集／冒険者たち」では、森詠、D・ジョーダン、逢坂剛、M・ギルバート、東理夫、北上二郎の作品が掲載された。

#### (4) 『EQ』

『ハヤカワミステリマガジン』と同じく海外ミステリを中心とする雑誌の性格から、海外作品の翻訳が多い。日本人による読物も、海外ミステリの紹介や評論、あるいは海外事情の紹介などが中心である。

目を惹いたものが、1980年代にふたつあった。そのひとつは、鮎川哲也の翻訳によるC・デイリー・キング「鉄路のオベリスト」(1981年1月号～7月号、

全4回)である。連載の第1回には戸川安宣の解説があるほか、第2回と第3回には解説記事が再録されている。前者は井上良夫「本格探偵小説」(初出『ぷろふいる』1936年4月号)、後者は早川節夫「オペリストものなど」(初出『別冊宝石』93号(1959年))であった。最終回には訳者による「『鉄路のオペリスト』連載を終えて」(2頁)が掲載された。

もうひとつは西村京太郎『東北新幹線殺人事件』(1982年7月号～11月号、全3回)である。これは「特別集中連載」とされ、「トラベル・ミステリー」と銘打たれて掲載された。西村はその後「西鹿児島駅殺人事件」(1987年3月号・5月号、全2回)、「宗谷本線殺人事件」(1989年3月号・7月号、全2回)も掲載している。

#### (5)『小説サンデー毎日』

『小説サンデー毎日』は、大手新聞社の雑誌であるだけに、ミステリを掲載しつつも、幅広くさまざまな記事を掲載していることに特色がある。たとえば、毎日新聞社の各部がもちまわりで執筆する「ゲラ刷り毎日新聞編集局」という企画があった。1号につきおおよそ3部局の記事が署名付きで掲載される。当初は本社の部局が担当していたようだが、1970年6月号からは国内外の支局や特派員が中心となり、記事数には上下があるものの、1972年9月号まで続いた。たとえば1971年8月号の北海道報道部「知床ブームうらおもて」は観光ブームに言及している。

一方、旅行や鉄道と銘打った小説が多く見られるものではない。目に付いたのは、1972年8月号～10月号まで3号連続で掲載された「旅行情報小説」である。いずれも井口泰子による読み切りの短編で、「蒜山高原の怪」(岡山)、「森林鉄道みやま号」(木曾谷)、「海蝕の鳥」(陸中海岸)の3編であった。このうち最初の8月号ではとくに「ブームに伝える」「ミステリータッチで描く」と惹句が付されている。

連載記事は、ほぼ1年単位で入れ替わる(表3)。1971年は竹村健一「脱文明の旅」で、オーストラリアのグリーン・アイランド、タヒチのモーレア島、コンゴ、マダガスカルといったアフリカなど、欧米とは異なる地域を実際に訪ねた旅行エッセイである。1972年の豊田穰「世界を食べ歩く」(途中3回の休載あり)は、ロシアを含むユーラシア大陸の体験を、主として食事の面からまとめたもので、紙幅が十分に割かれ読み応えがある。同年には木村正が2頁の旅行案内(略地図、問い合わせ先を掲載)を掲載しており、1月号は「一月の旅」というように、各号それぞれ「○月の旅」と銘打たれて、富士山麓や足摺

岬、立山黒部アルペンルートなど、国内の観光地がとりあげられている。

| 執筆者  | 連載名                | 期間             | 回  | 頁  |
|------|--------------------|----------------|----|----|
| 竹村健一 | 脱文明の旅              | 1971・1～1971・12 | 12 | 2  |
| 豊田穰  | 世界を食べ歩く            | 1972・1～1972・12 | 9  | 10 |
| 木村正  | ○月の旅（○は掲載月）        | 1972・1～1972・12 | 11 | 4  |
| 三浦哲郎 | 人里風土記              | 1973・1～1973・12 | 12 | 8  |
| 二村次郎 | （「人里風土記」グラビア）      | （同上）           | 12 | 7  |
| 木村正  | ドライブ情報             | 1973・1～1973・12 | 12 | 1  |
| 真鍋元之 | 懐かしの名作             | 1974・1～1974・12 | 12 | 5  |
| 木村二郎 | 名作の旅（「懐かしの名作」グラビア） | （同上）           | 12 | 4  |
| （多数） | 日本の四季（見開き口絵グラビア）   | 1976・4～1976・12 | 9  | 2  |

表3 『小説サンデー毎日』旅行関連連載記事一覧（筆者調べ）

1973年は三浦哲郎「人里風土記」が、二村次郎のグラビアと連動するかたちで連載された。これは岡山、花巻、草津、諏訪湖などの探訪記であり、のちに『ふるさと紀行』（毎日新聞社、1976年）として上梓された。また同年、木村正は「ドライブ情報」という1頁ものの旅行案内を載せている。

1974年は同様のグラビア連動で、真鍋元之「懐かしの名作」が連載され、「唐人お吉」「沓掛時次郎」「無法松の一生」など、1回に1作家1作品（12月号のみ「紋三郎の秀」と「弥太郎笠」の2作品）が取り上げられた。本文の方は作品と作家の紹介で、とくに地域に言及したものではないが、グラビア「名作の旅」は作品のゆかりの地を訪ねて撮影した写真を掲載している。連載終盤の10月号～12月号のグラビア末尾には、「あし」「みどころ」「あじ」として、ごく簡単ながら交通機関や名所が案内されている。

上記以外のグラビアについてまとめておこう。1971年～1972年のグラビアで、地域や旅行と関わるものはほとんど見られない。わずかに1971年2月号「黒潮に挑む 幻の魚を追って」（松本徳彦）のみである。1973年～1974年は連載と連動するが、1975年には、風景や旅行に関連する題材は見当たらない。1976年4月からは口絵のグラビア「日本の四季」というカレンダー仕立ての見開き頁ものが掲載されるようになるが、これも12月で終わり、その後、1977年9月の休刊まで、地域や旅行が取り上げられることはなかった。

## (6) 『小説推理』

同誌には旅行記事、とりわけ連載記事が散見され、大変興味深い。年代順に整理した表4の八木基克「旅の穴場ガイド」と「トラベル・コーナー」の間に



はグラビアとの連動企画があるが、これは表5として別途書き出した。

| 執筆者    | 連載名              | 期間              | 回  | 頁 |
|--------|------------------|-----------------|----|---|
| 松丘二九夫  | 旅のパトロール          | 1964・2～1965・9   | 12 | 2 |
| 寺下辰夫   | 味の旅              | 1966・2～1967・11  | 22 | 2 |
| (多数)   | 旅の恥を書き捨て         | 1968・3～1969・5   | 15 | 2 |
| 八木基克   | 旅の穴場ガイド          | 1971・2～1971・6   | 5  | 2 |
| 八木基克   | トラベル・コーナー        | 1972・4～11/12 合併 | 8  | 2 |
| 天道匡史   | 欧州通信・出発への誘い      | 1976・1～1977・2   | 8  | 4 |
| 小林秀美   | ヨーロッパ・メルヘンの旅     | 1977・6～1977・12  | 7  | 3 |
| 田村隆一   | ぼくの東京遊覧          | 1979・1～1980・12  | 24 | 8 |
| ヒサクニヒコ | ヒサクニヒコの冒険・望見また呆駿 | 1982・1～1982・12  | 12 | 5 |
| 小林秀美   | ぶらり歩き・東京         | 1986・1～1987・12  | 24 | 3 |
| 渋谷高弘   | 四方八方気まま旅         | 1987・1～1988・12  | 24 | 2 |
| 新妻喜永   | 山・四季の移ろい         | 1988・1～1988・12  | 12 | 3 |

表4 『小説推理』旅行関連連載記事一覧（筆者調べ）

（頁は各回の基本的な頁数を示した。休載は特に明記しなかった。）

旅行に関する記事がはじめてみられるのは、1964年2月号「正月旅行おたのしみ秘帖」である。同年は5月号に時津徹「ミステリー風土記」があり、地域別にミステリ作品を紹介している。また、7月号からは松丘二九夫「旅のパトロール」の連載がスタートする。これは基本的にある地域を題材に、エピソードを交え旅行案内風に紹介する2頁のものである。

1965年には作品の舞台を訪ねる巻頭グラビアが2回掲載された。1月号「観光地によどむ影のある風景「花実のない森」—松本清張—の舞台に行く」と7月号「「海の墓標」の舞台に行く」である。とはいえ、この訪問は作品の舞台となる場所のモデルを発見しようとするものではなく、箱根や岩国、あるいは北海道の各地の風景を掲載したものである。また、後述のようにグラビアと読物のあいだに緊密な連携がなされるものではなく、グラビアと「旅のパトロール」との相関性は見られない。1月号の「旅のパトロール」は休載であり、7月号ではグラビアが北海道であるのに対し、連載は瀬戸内だった。

1966年2月号から各地の郷土料理などを取り上げた寺下辰夫「味の旅」が連載された。その後、1968年3月号からは「旅の恥を書き捨て」という連作がはじまった。これは旅を題材にしたリレーエッセイで、作家のみならず芸能人も加わっていた。1回目から列举すると、邦光史郎、小松左京、真鍋博、園山俊二、星新一、栗田勇、立川談志、三遊亭円楽、富永一朗、ハナ肇、久里洋二、

田中小実昌、筒井康隆、川内康範、八切止夫という顔ぶれだった。

1970年には、旅行に関する特別企画や特別読物が掲載されるようになる。10月号では「楽しい一泊二日のドライブコース」として那須高原、奥日光、浜名湖、南伊豆がグラビア4頁で紹介、加えて1頁ながら略地図と簡単なコース案内もある。11月号は特別読物として、八木基克「全国縦断ピンクゾーンを探る」として、4頁にわたって北海道から九州まで温泉地を中心に男性向けの場所を紹介している。読物とあるように、これにはグラビアは付されていない。続く12月号はグラビア特別企画「”いい湯だなア〜”晩秋におすすめする”野天風呂”コース」と題し、各地の温泉が5頁にわたって掲載された。

旅行に関するグラビアと記事の掲載は、この後も続く。表5に1971年から72年3月号までのグラビアと旅行記事を整理した。なお旅行記事はすべて八木基克が担当している。1971年2月号から6月号までは、3月号に例外があるものの、グラビアは地域ではなく、テーマを決めて各地の風物の写真を掲載している。一方で「旅の穴場ガイド」は特定の場所を取り上げた旅行案内である。

1971年7月号「初夏の旅・北海道」ではじめて、グラビアと旅行案内が連動する。この後、1972年2月号まで、特定の地域のグラビアと旅行案内が続くが、3月号でスペインが取り上げられ、グラビアと旅行記事の連動は終わる。この間、旅行記事は一貫して八木基克が担当するが、1972年3月号のみ北村良三がスペインのミステリ作品を紹介する1頁コラムを書いている。その後、旅行記事は八木基克「トラベル・コーナー」として存続、グラビアはイラストに取って代わられる。

その後も表4にあるように、何らかのかたちで旅行記事の連載は続いている。天道匡史「欧州通信・出発への誘い」と小林秀美「ヨーロッパ・メルヘンの旅」は滞欧体験のエッセイである。一方、「ぼくの東京遊覧」は後半で「半七捕物帖を歩く」と副題が付いている通り、田村隆一が半七ゆかりの地を訪問した写真とエッセイを組み合わせたもので、巻中グラビアにあたる。なお、連載終了後、『半七捕物帖を歩く——ぼくの東京遊覧』（双葉社、1980年）としてまとめられた。「ヒサクニヒコの冒険・望見また呆験」はイラストと文章からなる体験記で、旅行ばかりでなく自衛隊の空挺訓練や映画のエキストラなどもある。トラベルライター渋谷高弘による「四方八方気まま旅」は、各地の旅行案内を旅行記風に見開きにまとめたもので、略図と交通機関の案内、問い合わせ先がまとめられている。小林秀美「ぶらり歩き・東京」はイラスト2葉（うちひとつは見開き）に文章が付されており、新妻喜永の写真による「山・四季の移ろい」

も同様の写真2葉と文章の構成、ともに巻頭グラビアの扱いである。

| 年    | 月    | 種別   | 題名                          | 頁数            |   |
|------|------|------|-----------------------------|---------------|---|
| 1971 | 2    | グラビア | 全国に点在する石仏誌上公開 失われゆく日本美を訪ねて… | 6             |   |
|      |      | 読物   | 旅の穴場ガイド 繋温泉（岩手県）の巻          | 2             |   |
|      | 3    | グラビア | 第一線画家の描くヌード傑作選              | 9             |   |
|      |      | 読物   | 旅の穴場ガイド 勝浦温泉（和歌山県）の巻        | 2             |   |
|      | 4    | グラビア | 春の旅行シーズンに贈る!! おらがふるさと“味”自慢  | 6             |   |
|      |      | 読物   | 旅の穴場ガイド 徳島市（徳島県）の巻          | 2             |   |
|      | 5    | グラビア | 春らんまん花の旅                    | 5             |   |
|      |      | 読物   | 旅の穴場ガイド 湯涌温泉（石川県）の巻         | 2             |   |
|      | 6    | グラビア | 日本の伝統美 ふるさとの祭り              | 5             |   |
|      |      | 読物   | 旅の穴場ガイド 熊本市（熊本県）の巻          | 2             |   |
|      | 7    | グラビア | 初夏の旅・北海道                    | 7             |   |
|      |      | 読物   | 初夏の旅・北海道                    | 4             |   |
|      | 8    | グラビア | 潮風さそう茨城旅情                   | 7             |   |
|      |      | 読物   | 潮風さそう茨城旅情                   | 4             |   |
|      | 9    | グラビア | 日本美残す能登・金沢への旅               | 7             |   |
|      |      | 読物   | 日本美残す能登・金沢への旅               | 4             |   |
|      | 10   | グラビア | 海と山の景勝の地・紀州                 | 4             |   |
|      |      | 読物   | 海と山の景勝の地・紀州                 | 4             |   |
|      | 11   | グラビア | 晩秋の景勝美・京都への旅                | 4             |   |
|      |      | 読物   | 晩秋の景勝美・京都への旅                | 4             |   |
|      | 12   | グラビア | 山陽路の名勝を訪ねて…                 | 4             |   |
|      |      | 読物   | 山陽路の名勝を訪ねて…                 | 4             |   |
|      | 1972 | 1    | グラビア                        | 素朴な自然と海岸美・四国路 | 4 |
|      |      |      | 読物                          | 素朴な自然と海岸美・四国路 | 4 |
| 2    |      | グラビア | 甦る伝統の島・沖縄への旅                | 4             |   |
|      |      | 読物   | 甦る伝統の島・沖縄への旅                | 4             |   |
| 3    |      | グラビア | 世界ミステリ・ノベルス（スペイン）           | 4             |   |
|      |      | 読物   | 世界ミステリ・ノベルスの旅 スペイン          | 1             |   |

表5 1971年2月～72年3月『推理』グラビアと旅行案内記事（筆者調べ）

実作品の掲載状況については調査が終了していないため、本稿でくわしく述べることはできないが、1973年～1974年の傾向についてのみ、簡単に触れておこう。1973年の3月から三好徹が「民話ミステリー」という枠組みで、継続的に作品を発表している。3月号「断崖の死角」、4月号「帰ってきた鬼女」6月号「他人の月」と続き、その後は他の作家との競作という枠ながら8月号「海の墓」、11月号「貴船山心中」、1974年1月号「恨みの美女」、3月号「禁じられた愛」で終わる(ii)。ほかには1973年4月号に「特集 空と海のミステリー」として、高橋泰邦「愛の逆潮」と福本和也「調布空港殺人事件」があった。1974年では斎藤栄の棋士小説のなかで、目次の惹句に地域性を盛り込んだものが見られた。7月号「足摺岬の罟」では「漂泊の掛け将棋士が四国遍路中、古ぼけたお堂の中で発見した捨て子とその因果な顛末」とあり、9月号「姫路城で会った女」には「姫路に足を踏み入れた大徳寺英五郎——賭将棋の現場を警官に襲われたが、その蔭に!？」と付されている。なお、これに続く11月号「消えたスター・ルビー」の惹句は「没落華族を襲った凶悪殺人事件——輝やくルビーの紛失と愁しい美少女の失踪の謎は!？」とあるため、このシリーズは必ずしも地域性を強く打ち出しているものではない(iii)。

上記のほかに興味深いのは、『別冊小説推理』1976年盛夏特別号(8月)の「日本縦断“旅の小説”特集」である。巻頭随筆12名には出身県が付され「旅のミステリー・ベスト10〈各県別〉」として10作品が掲載されている。その他にも「旅の読物ベスト6」「土と故郷の小説・ベスト5」など、すべての記事に何らかの旅行あるいは地域性が付与されている。

## 5、若干の考察と今後の展望

前章では、各雑誌における旅行あるいは地域に関する記事について調査した結果を述べたが、これについて若干の考察を加えたい。

『ハヤカワミステリマガジン』では、海外事情の紹介や海外滞在記などが散見される一方、日本の地域あるいは国内旅行に関する記事は見られない。これは海外ミステリ専門誌という性格に由来するものと想われる。とはいえ鉄道ミ

---

ii これらは『帰ってきた鬼女 殺人民話集』(双葉社、1974年)にまとめられ、さらに改題され『断崖の死角 殺人民話集』(文藝春秋、1982年)となった。

iii これらはのちに『振り飛車英五郎』(双葉社、1983年)としてまとめられた。

ステリや地域性を打ち出した特集など、ゆるやかな意味で国内ミステリの状況とも接続していると言えるだろう。

『EQ』の光文社は、西村京太郎『寝台特急殺人事件』のカップノベルズの版元であるが、雑誌に西村作品が掲載されたのは1982年であった。それに先行して、鮎川哲也の翻訳が掲載されているなど、興味深い動きも見られる。トラベル・ミステリのなかで『EQ』を含むミステリ雑誌の果たした役割について、さらに詳しく検討する必要がある。

『小説サンデー毎日』では、毎日新聞記者が持ち回りで担当する「ゲラ刷り毎日新聞編集局」は地方支局や特派員が頻繁に登場している。これは在京出版社とは異なる全国取材網を持つ新聞社発行の雑誌という特色を生かした企画であると同時に、このような企画が長く続くところから見ると、地方への注目が一定程度存在していたことを示していると思われる。また、1972年8月の「旅行情報小説」に付された惹句「ブームに応える」からは、旅行ブームの影響をうかがうことができる。竹村健一、豊田穰、木村正らの連載記事も、そのような旅行記事への需要に対応したものといえる。

『小説推理』でグラビアと読物の連動がはかられた1971年は、国鉄のディスプレイ・ジャパン・キャンペーンの時期にあたる。石仏や祭りを「日本美」「伝統美」と形容する視線のあり方も、当時の『an・an』『non-no』と通底するものがある(iv)。この日本的なものへの眼差しは、『小説サンデー毎日』における三浦哲郎の連載「人里風土記」や、真鍋元之「懐かしの名作」の連動グラビアとも共通している。さらに言えば、作品や作家所縁の地を訪問する行為は、いわゆる文学散歩とも重なり合うだろう。

また、実作品の掲載状況については十分な調査を行っていないが、前章で述べた1973年～1974年の傾向を見るだけでも、地方への注目を取り込んだ作品が散見されるのがわかる。従来の図式的な整理では1978年をトラベル・ミステリの画期としていたが、旅行ブームなどの動きを勘案すれば、1970年以降前後の作品に見られる地域性について検討する必要がある(v)。

各誌の記事について思いつくままに私見を連ねたが、これらは、旅行ブームに関する広い同時代の言説空間のなかに雑誌を置いて考察する必要性を示唆し

---

iv 『an・an』『non-no』の位置づけについては、野村典彦(2011)が詳しい。

v 斎藤栄については権田萬治・新保博久(2012)でも言及され、原口隆行(2016)も1節を割いて扱うが『振り飛車英五郎』はとりあげられていない。

ている。もちろん、海外ミステリを中心とする『ハヤカワミステリマガジン』『EQ』と『小説サンデー毎日』『小説推理』を同列に並べることはできないが、今回の調査を見ても、後2誌が強く旅行ブームへ参入していたのに対し、前2誌にも旅行ブームとの弱いつながりが見て取れるのではないだろうか。とはいえ『大衆文学論叢』のように、旅行ブームとはまったく異なる様相の雑誌もあり、すべてのミステリ雑誌が旅行ブームと関連するものではないだろう。

本稿では、ミステリ専門誌のごく限られた範囲における旅行記事を扱ったに過ぎない(vi)。もとより、今回の調査は、目次を中心とした掲載の有無の報告にとどまっており、各記事の言説に踏み込んで分析するには至らなかった。とりわけ、各誌におけるトラベル・ミステリ作品の掲載に関しては、十分な分析ができていない。雑誌内の言説空間のあり方については、作品内容の確認を含め、さらなる調査が必要である。本稿では大まかな見通しを得たこととして、詳細な言説の分析については別稿を期すこととしたい。

## 付記

光文文化財団ミステリー文学資料館には、資料調査で多大なるご協力を賜った。同館は2019年7月末に閉館となったが、ここに記して心より感謝申し上げますとともに、調査結果の公表が遅れたことをお詫び申し上げたい。

本研究はJSPS 科研費 JP18K00272 (基盤研究 (C)「事例研究と連携させた1970年代以降の日本現代ミステリ史の構築」、研究代表者・押野武志)の助成を受けたものである。

本稿の一部は、上記研究課題の研究会での口頭発表「昭和40～50年代のミステリ専門誌における旅行記事 ミステリー文学資料館所蔵資料の調査から」(2020年5月8日オンライン開催)に基づいている。

調査に際し貴重なご助言を賜った先生方に、深く感謝申し上げます。

---

vi 旅行ブームに関する言説空間を把握するためには、ミステリ誌以外のメディアがより重要であり、『小説サンデー毎日』の事例からも推測できるように、総合的な週刊誌や月刊誌の動向は特に注目すべきであろうが、それらの調査は筆者の能力をはるかに超える。管見の限りで言えば、1950年代ではあるが、『毎日新聞』の事例を貴多野武次(2002)が取り上げている。また、『暮らしの手帖』誌で「日本紀行」が連載されたこと(1963年71号～)も、このような旅行ブームとの関連から捉えることができるだろう。

## 参考文献

1. 老川慶喜『鉄道と観光の近現代史』河出書房新社（河出ブックス）、2017年。
2. 老川慶喜『日本鉄道史 昭和戦後・平成篇』中央公論社（中公新書）、2019年。
3. 佳多山大地『トラベル・ミステリー聖地巡礼』双葉社（双葉文庫）、2019年。
4. 貴多野武次「観光振興とメディア 毎日新聞社による観光地百選イベント」（津金澤聰廣編著『戦後日本のメディア・イベント [1945-1960年]』世界思想社、2002年所収）。
5. 権田萬治・新保博久監修『増補改訂日本ミステリー事典』新潮社（電子書籍）、2012年。
6. 成相肇「まえがき——ディスカバー、ディスカバー・ジャパン」（成相肇・清水弘子編（展覧会図録）『ディスカバー、ディスカバー・ジャパン「遠く」へ行きたい』東京ステーションギャラリー、2014年所収）。
7. 野村典彦『鉄道と旅する身体近代 民謡・伝説からディスカバー・ジャパンへ』青弓社（越境する近代）、2011年。
8. 原口隆行『鉄道ミステリーの系譜 シャーロック・ホームズから十津川警部まで』交通新聞社、2016年。
9. 森下祐行「ミスダス」（<http://mysterydata.web.fc2.com/index.html>）2021年2月閲覧。
10. 山前謙「新装版への脱線気味な解説もしくは増結車輛」（鮎川哲也編『無人踏切』光文社（光文社文庫、鉄道ミステリー傑作選）、新装版、2008年所収）。
11. 山前謙「解説」（ミステリー文学資料館編『名探偵と鉄旅』光文社（光文社文庫、鉄道ミステリー傑作選）2016年所収）。
12. 立教大学観光学部旅行産業研究会編著『旅行産業論改訂版』日本交通公社、2019年（改訂2版）。